

道南の埋もれた「原生花園」 砂崎海岸

北斗市 長谷 昭

はじめに

砂崎海岸は、道南の秀峰駒ヶ岳の裾野が突き出て、対岸の室蘭市の絵鞆半島とともに内浦湾の湾口を形成する森町砂原地区の岬である（図 1）。シロハヤブサの道内唯一の定期的飛来・越冬地として知られ（河井ほか 2003）、ユキホオジロ等の国内では稀少な冬鳥も飛来し、冬季には探鳥会がしばしば開催されている（ファウラ 2016a, 2016b）。森町の Web ページでは、「道内でも珍しい、砂浜に立つ現役の灯台で、周辺は釣りのポイントとしても人気。また、渡り鳥の視察ポイントとして野鳥愛好家たちを魅了しています。」と簡単に触れてい

る程度（URL: <https://www.town.hokkaido-mori.lg.jp/docs/2014090400341/>；2010 年 3 月 25 日版）であり、道南最大と思われる広大な砂丘と、その内側の広い海岸湿地には多くの特徴的な植物が生育しているにも拘わらず、植物に関しての記述は皆無である。

この海岸は、灯台がある岬の先端から太平洋側は護岸工事がなされて人工海岸となっているが、内浦湾側は広大な砂丘を含む自然海岸である。内陸側の湿地部分は、1970 年代あたりから盛り土による農耕地化が試みられたようだが、現在は放棄されて原野化しており、その名残が航空写真でも確認できる（図 1 挿入図）。また、人為的攪乱を受けた地域を中心に、オオハンゴウソウやオオアワダチソウなどのキク科の外来植物が広範に侵入しており、在来植生を圧迫している。砂丘部分は波による浸食が著しく、また、大量のゴミが打ち上げられたまま放置されるなど、荒涼とした景観となっており、景勝地である灯台への車道も砂に埋もれて不通状態が続いている。

このような荒廃した環境が影響してか、砂崎海岸の植生に関して公刊された文献は筆者が知る限りでは全く無く、環境省の 1/50000 植生図上でも不完全にしか記載されていない。そこで本稿では、砂崎海岸の砂丘部分と湿地部分及びその遷移部分等に分けて、優占する維管束植物を中心に紹介するとともに、この海岸における特筆すべ

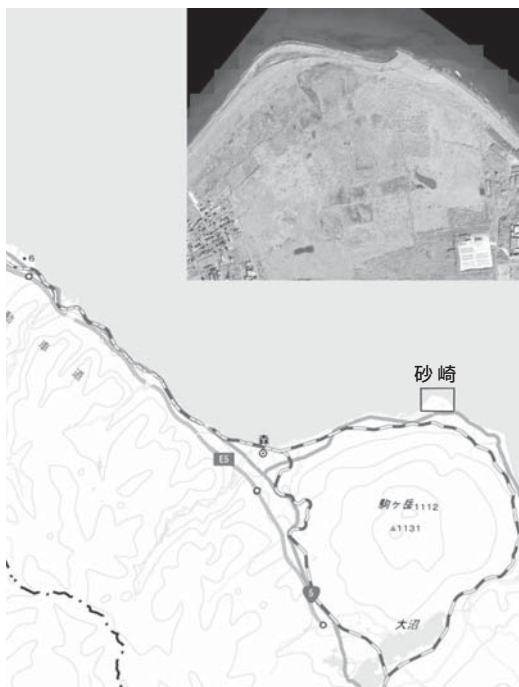


図 1 砂崎海岸の位置 航空写真を挿入。電子国土 Web（国土地理院）を加工して使用

き植物群落について記載する。また関連して、この海岸植生に直接的・間接的に依存して生息する夏鳥を紹介し、この海岸の保護の必要性を検討する。

砂崎海岸における維管束植物の特徴

(1) 砂丘植生

砂崎海岸は千島寒流の影響を強く受けており、海に直面する砂丘部分には、ハマニンニク（テンキグサ、イネ科）の群落帯状に分布している。その内陸側にはコウボウムギ、コウボウシバ（カヤツリグサ科）、ハマヒルガオ（ヒルガオ科）、ハマニガナ、シロヨモギ（キク科）、ハマボウフウ（セリ科）などが群生し、さらにその内陸側にはハマナス（バラ科）とハマエンドウ（マメ科）の群落が広がっており、灯台と合わせて見事な景観を作っている（図2）。ウンラン（オオバコ科）、ナミキソウ（シソ科）、アキノノゲシ（キク科）なども秋にかけて目立つ植物であり、まさに典型的な北国の



図2 砂崎灯台とハマナス 2021.6.16

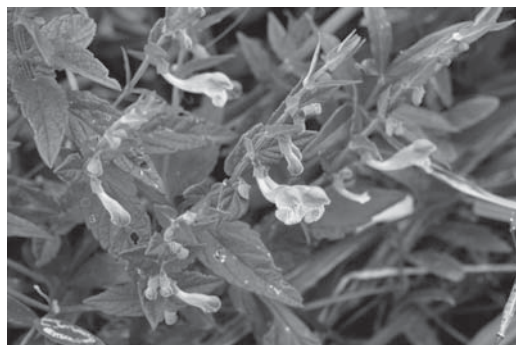


図3 エゾナミキソウ 2017.8.7

砂丘植生が展開されている。その中で異質であるのはオニシバ（イネ科）の群落であるが、これについては別項で取りあげる。

(2) 湿地植生

塩害の影響が大きく、雨量が多い時には冠水する海岸湿地部分にはヤラメスゲ（カヤツリグサ科）が優占しており、イヌイ（イグサ科）、ヒメハリイ（カヤツリグサ科）なども群生している。冠水がやや少ない湿地部分はヨシ（イネ科）群落が大きな面積を占め、クサヨシ、ヤマアワなどのイネ科植物が目立つ。

内陸側の塩害の影響が少ない地域には、アゼスゲ（カヤツリグサ科）、エゾノレンリソウ（マメ科）、エゾミソハギ（ミソハギ科）、ウナギツカミ（タデ科）、ヤナギトラノオ（サクラソウ科）、オグルマ（キク科）などの、道内に一般的な湿地性植物が分布している。また、クサレダマ（サクラソウ科）やドクゼリ（セリ科）などの、湿地性の高茎草本も生育している。

その中で、特に稀少と思われるのはエゾナミキソウ（シソ科、図3）であり、アカネムグラ（アカネ科）と同所的に群生している。さらに、ノハナショウブ（アヤメ科）とともにヒオウギアヤメ（アヤメ科）の群



図4 センダイハギ群落の一部 2017.6.18

落がみられるが、これについても後述する。点在する池沼ではフトイ(カヤツリグサ科)が優占する。

(3) 砂丘から湿地への遷移帯及び乾燥化が進む地帯の植生

砂崎海岸は盛り土や護岸工事の影響によって乾燥化がすすんでおり、ここに分類される植生が比較的大きな面積を占める。

この地帯で目立つのは初夏にはセンダイハギ(マメ科)、夏はエゾツルキンバイ(バラ科)である。エゾツルキンバイは砂丘と冠水する湿地の境界線沿いに帯状に分布するが、センダイハギはこの地帯全域に渡って大群落を形成している。これについても後述する。

この地帯にはウンラン、ナミキソウ、ア

キノノゲシなども入りこんでおり、ススキ(イネ科)やヤナギ類及びアキグミ(グミ科)なども群生し、オニグルミ(クルミ科)も随所に生育している。また、メマツヨイグサ(アカバナ科)やムラサキツメクサ(マメ科)等の外来植物が目立つ地帯でもある。

(4) 特徴的な植物群落

砂崎海岸には、道南あるいは全道的にも注目されると思われる比較的規模の大きい植物群落が見られる。まず、初夏に最初に出現するのがセンダイハギの大群落である(図4)。センダイハギは、道東の海岸でしばしば大群落を作っているが、道南では随所に点在するものの大群落は文献的には報告されていない。この砂崎海岸では、砂が深い砂丘部分と頻りに冠水する湿地部分などを除いて、センダイハギが大群落を形成しており、この海岸を1番に特徴付けるものとなっている。

ヒオウギアヤメも、厚岸のあやめヶ原など、道東の海岸で大規模な群落を作っているが、センダイハギ同様に、道南では点在するか小規模な群落にとどまっている。しかし、砂崎海岸では、数万~数十万株と言われている道東の大群落には及ばないもの



図5 駒ヶ岳を背景としたヒオウギアヤメ群落 2021.6.16



図6 オニシバ群落とオニシバの拡大(左上) シロヨモギ、コウボウムギなどが入りこんでいる。2016.9.19

の、数千株規模の道南では最大と思われるヒオウギアヤメ群落が見られる(図5)。

さて、道内における稀少性という観点からは、オニシバ群落が砂崎海岸の砂丘植生を特徴付ける群落と思われる(図6)。オニシバは岩内海岸が北限と考えられている(桑原 2008)が、砂崎海岸のオニシバ群落も、太平洋側の北限域群落として貴重なものと思われる。

砂崎海岸に生息する夏鳥

「はじめに」でも触れたように、砂崎海岸は野鳥愛好家にとってはよく知られた観察フィールドとなっているが、主に注目されるのはシロハヤブサ等が飛来する冬季のようである。しかし、湿地・湿原植生は、多くの野鳥にとっても重要な生息環境を提供しており、砂崎海岸でも、特にヨシ群落が広い面積を占めて湿地性の低木が点在する湿地部分には、多数の小型のスズメ目の夏鳥が見られる。そのこともあり、1999～2004年度にわたって行われた環境省自然環境局生物多様性センターによる第6回

自然環境基礎調査において、砂崎海岸が夏鳥調査の対象地の1つとなっている。尚、その調査では植生も調査対象となっているが、残念ながら砂崎海岸では鳥類のみの調査となっている。

そこで、その報告書(環境省自然環境局生物多様性センター2004)と筆者自身の観察をもとに、砂崎海岸に生息する夏鳥について紹介する。尚、砂崎海岸には多数のカモメ類、トビ、カラス類も生息するが、海岸一般にみられる鳥類であり、砂崎海岸の植生と結びつきが弱いので、対象外とする。

報告書では、2002年と2003年の3回の調査において、前記の鳥類を除いて、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アマツバメ、ツバメ、ショウドウツバメ、ヒバリ、ノビタキ、ウグイス、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワの13種の夏鳥の生息が確認されている。他に、探鳥会の情報としてオオヨシキリの生息も追加されている。その中で、ノビタキ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワが優占するとされる。筆者もこの4種を頻繁に目撃しているが、他にチゴハヤブサ(図7)と留鳥であるがハクセキレイも観察している。

この種数や観察された個体数は、調査対象となった道内の他の湿原等と比較しても遜色なく、砂崎海岸は、夏鳥にとっても貴重な生息環境を提供していると思われる。

この種数や観察された個体数は、調査対象となった道内の他の湿原等と比較しても遜色なく、砂崎海岸は、夏鳥にとっても貴重な生息環境を提供していると思われる。

おわりに

道南では、海岸植生としては一部の岩上



図7 チゴハヤブサ 2016.10.2

植生（亀田半島側では「日浦海岸の海岸植生」と「尾札部～恵山の海岸植生」）が特定植物群落に選定されているが、小清水原生花園のような、砂丘植生を含むオホーツク海沿岸などに特徴的な「原生花園」的植生は見ることができないと思われた。しかし、砂崎海岸の中でも、特にヒオウギアヤメ群落がある一帯は、ハマナスやハマエンドウ及びセンダイハギのような砂丘性の植物と、ヒオウギアヤメ、ヤナギトラノオ、エゾノレンリソウなどの湿地性の植物が近接して群落を作り、まさに「原生花園」的景観を作っている（図8）。

一方、全く管理されずになかば放置されているために、湿地に強いオオアワダチソウが広範囲に進出しており、ヒオウギアヤ



図8 ヒオウギアヤメ群落を中心とした「原生花園」的景観 2017.6.18

メの群落にも侵入している。また、ドクガがしばしば発生し、植物観察には注意が必要である。さらに、海岸に打ち上げられる大量のゴミの他、不法投棄のゴミや増加しつつあるエゾシカの踏み跡も目立ち、「原生花園」的景観を浸食している。

砂崎海岸の植物は、一時期乱獲されて急激に減少したハマボウフウ以外は、地元住民にもあまり知られていない。また、「はじめに」でも触れたように、植物の専門家はもちろん、植物愛好家にもほとんど知られてはおらず、森町のWebページが示す通り、行政側にもその稀少性に関する認識はない。

これ以上の放置は、植生自体のみならず、ヨシ群落等の自然植生に依存して生息している野鳥への悪影響も必至であるので、道南では稀少なこの砂崎海岸の植生の保全に向けての、行政側への働きかけが必要であると思われる。

謝辞

北海道教育大学函館校の三上修教授には、砂崎海岸で観察した野鳥の同定とともに、砂崎海岸の鳥類資料に関する情報を提供して頂いた。また、本稿の野鳥関係部分に関する貴重な助言を頂いた。あわせて感謝致します。

引用文献

- ファウラ編集部．2016a．「冬の道南・野鳥の楽園撮影会」が行われました．ファウラ 52: 58-59．
ファウラ編集部．2016b．野鳥観光ただいま進行中．ファウラ 54: 26-33．

環境省自然環境局生物多様性センター.
2004. 第6回自然環境基礎調査 生物多
様性調査 生態系多様性地域調査(湿原
生態系調査) 報告書 — 北海道夏鳥調査
—. 環境省, 東京.

河井大輔・川崎康宏・島田昭英・諸橋淳.
2003. 北海道野鳥図鑑. 亜璃西社, 札幌.
桑原義晴. 2008. 日本イネ科植物図譜. 全国
農村教育協会, 東京.

会員が撮影した道南の植物④



スイカズラ 北斗市 2020.6.28
撮影: 酒井 信



エゴノキ 函館市 2015.6.12
撮影: 酒井 信



オオバクロモジ 函館山 2011.5.15
撮影: 新田 紀敏



キカラスウリ 松前町 2011.8.18
撮影: 新田 紀敏